

通訳教育における通訳コンテストの意義と その効果についての検証

Examining the significance and effect of
NUFS interpretation contests for interpretation pedagogy via
an analysis of participant/audience data.

浅野輝子

Teruko Asano

25万年前、地球上に人類の始祖として出現したホモ・サピエンス（原始人類）は、コミュニケーション手段として、他の生物が持ち合わせることのない言葉という道具を取得し、その転位性、創造性によって、高度な情報交換をし、膨大な情報蓄積をすることで、進化発展を遂げて参りました。それ以来、人は、学習することによって、進化をし続けるという宿命を負って、この世に誕生してきていると思われます。そして人は一生を通じ学習することによって成長していくものと思われます。人は幼児の時代にあっても親のしぐさを見ながらマネをすることで一生懸命憶えます。また、憶えることによって親が喜ぶ姿を見ることが出来ます。それが又、子どもにとって最高の喜びであり、その親の喜びを得るといことが子どもにとっても、学ぶための最大の動機付けになっているのです。つまり我々が学び、知識並び技術を習得するという行為には何らかの動機があります。そして、教育現場においても、教育者にとっては、学ぼうとする者に対して、学ぶためのより強い動機を与え、モチベーションアップをもたらす事が最大の責務ではないかと考えます。

私は常々教育者として、通訳を学ぼうとする学生のモチベーションアップに繋がるような授業をしたいと考え、その為の努力をして参りました。そし

て更なるモチベーションアップをもたらし、飛躍的なスキルアップをさせる為に通訳コンテストが何らかの動機付けとなるのではないかと考え、その開催に向けて、腐心してきました。

そして、一昨年、全国の通訳教育を行っている大学に呼びかけ、出場者を募ることによって、学外に開かれた形での学生通訳コンテストを開催する事ができました。第一回通訳コンテストでは、皆様よりスピーカーの発言に対して、原稿を読むのが不自然というご指摘を受けました。しかしながら、サブトピックの難易度を揃える為には、ある程度の原稿は必要だと思われます。今回は、そのようなご指摘を踏まえ、スピーカーに対してはできるだけ自然な語り口調での発言をお願いしました。

今回、その様な反省点を基にして学生通訳コンテストも第二回目大会を2008年12月13日に開催することができました。今回第二回学生通訳コンテストを開催するにあたり、通訳を学ぶ学生にとって、通訳コンテストが学ぶための動機づけとしてどのような効果をもたらしているかを確かめたいと思い、来場者に対しては、通訳コンテスト当日、コンテスト終了後に、アンケートを実施し、出場者に対しては、アンケート用紙をお渡しして、後日返送して頂くという方法でアンケートを実施いたしました。本稿ではそのアンケート結果についてご報告すると共にそのアンケート結果についての分析をさせて頂きたいと思えます。

はじめに、今回行われた通訳コンテストの概要について説明いたします。
コンテストの形式について

英語のスピーカーと日本語のスピーカーによって、その時代において注目されている社会的問題をメインテーマとして取り上げ、コンテストに出場する人数分の難易度を揃えたサブトピックに分けて話していただき、その話す内容を日本語から英語、英語から日本語へと逐次通訳していただきます。そして、情報の正確性、表現の適切さ、プレゼンテーションについて審査するというものです。

まず、日本語のスピーカーが30秒話し、それを1分間の持ち時間内で学生が

英語に逐次通訳し、引き続きスピーカーが30秒話し、同じように1分間の持ち時間内に学生が英語に逐次通訳致します。そのあと、英語スピーカーが30秒話し、それを1分間の持ち時間内で、日本語に逐次通訳し、引き続きスピーカーが30秒話し、同様に、1分間の持ち時間内に学生が日本語に逐次通訳いたします。

最後に、それぞれのスピーカーがテーマについての結論を30秒ずつ述べ、それを1分間の持ち時間内で学生が逐次通訳いたします。

この対談にあたり、始めと終わりにモデレーターが、サブトピックの提示とコメントについて、英語で10秒語りますが、それについても学生に逐次通訳していただきます。

コンテスト出場者は、公平を期すために、当日、出場する順番をくじ引きで決めることによって、初めて自らのサブトピックが決まります。そしてその内容を日本語から英語、英語から日本語へと逐次通訳していただきます。

第一回大会のテーマは、環境問題、そして第二回目の今大会では多文化主義について話していただきました。

また、コンテスト出場者に対しては、前もってメインピックとサブトピックについて明らかにし、その際の重要なキーワード及び関連する図書等を教えることによって、実際に通訳者が行う事前の下調べと同様な準備を行うことができるようにしました。今回のコンテストには、全国から10大学、大阪大学、京都外国語大学、神戸市外国語大学、神戸女学院大学、大東文化大学、津田塾大学、東京外国語大学、明海大学、立教大学、名古屋外国語大学より12名の学生が出場しました。以上がコンテスト形式の概略です。

以下に、今回取りましたアンケートについて説明いたします。

今回、通訳コンテストの出場者と来場者の2種類のアンケートに分けて実施いたしました。

まず、来場者のアンケートについて説明いたします。来場者数は延べ350名ほどでしたが、そのうち76名分のアンケート回収ができました。

今回のデータは、アンケートの性質上、量的としてではなく、質的データ

に特化して採取・分析しています。

来場者のアンケート結果について 質問に沿って説明いたします。(資料1参照)

質問1. の来場者についてですが、

大学生が一番多く、次に一般、教員、大学院生、高校生の順となっております。

質問3. 通訳コンテストを観覧したいと思った理由

質問4. 通訳コンテストを観覧した感想についてですが、

多くの大学生が、通訳という仕事に興味をもっており、このコンテストを観覧した結果、通訳は大変な仕事ということを感じながらも、より通訳という仕事に対して興味を増した、ということが分かると思われます。

また、アンケートでは、大学生が最多でありましたけれども、実際の来場者の中には、高校生の方も多く見られまして、高校生レベルにおいても大学に於ける通訳教育や大学生の英語レベルに対して興味を持っていると思われます。また、一般の方や教員の方も数多くお見えになっていましたが、社会に出た後も、大変な仕事と思いながらも、通訳に対して興味をお持ちになっていることが分かります。また、講演会等に興味があり、聴きたかったと答えた人が23名いましたが、第一回通訳コンテストでは、大阪大学大学院教授で、津田塾大学創始者である津田梅子氏のご親族にあたられます津田守先生に「津田梅子さんのお父様の津田仙さんについて」と題して英語でお話して頂き、珍しいエピソードなどを交えてお話を頂きました。そして第二回は、国際教養大学大学院教授でサイマル・インターナショナル顧問である小松達也先生に「通訳の喜び」と題してご講演頂きました。このような今もって通訳者としても第一線で活躍されている方々に普段では伺えない先生の貴重な通訳としての体験談をお話していただいた事は、これからその世界を目指す者にとって大変貴重な体験となったと思われます。また、今回は、12名の出場者に引き続いて、通訳デモンストレーションとして、東京外国語大学教授でNHKBS、CNN 同時通訳者の鶴田知佳子先生に壇上にて通訳コンテストのサ

ブトピックの続きの部分を逐次通訳していただきました。その際、プロ通訳者が通訳の現場で行っているノートテキングのデモンストレーションをしていただきました。会場からは、鶴田先生の神業のようなメモ取りのスピードに感嘆の声が上がりました。これも又、普段目にする事のできないプロ通訳者の卓越したスキルを知り、自らのスキルアップを図る上で大変参考になったと思われまます。

質問5. コンテスト開催についての感想ですが、

観覧者の方の大多数がコンテスト開催についても大変意義があると答えており、主催者としても大変満足ゆく結果でありました。

次に、出場者のアンケート結果について説明いたします。(資料2参照)

出場者12名中10名よりアンケートの回収ができました。以下順を追って説明していきます。

英語を勉強しようと思ったきっかけは何ですか?という質問1. についてですが、

出場者の多くが高校留学、もしくは帰国子女であったり、何らかの形で海外滞在を契機として、外国の文化に触れたり、外国人と交流することに興味を持つことによって、英語能力を向上させるモチベーションアップにつながっているとと言えます。

今回、通訳コンテストに出場を決意した理由は何ですか?という質問2. についてですが、

通訳コンテストの出場資格については、通訳コンテストの副次的目的として、他大学との交流という点もあり、担当教員のご推薦を条件としているため、③の先生や知人に勧められたから、が多数でした。

しかし、②の自分の力を試したかったから、という理由も4名おり、①と共に学生が自主的に参加しようとしたものと思われまます。

次に、質問3の通訳コンテストに出場しての感想についてですが、

②と③をあげた学生が最も多く、自分の能力レベルを知ることによって、今後の学習に対して、モチベーションアップにつながったと思われまます。又、

④にありますように、このような機会を得て、他大学の学生との交流がよい刺激になるとも考えられます。

次に質問4. と質問5. にみられますように、今回、コンテストに参加された学生の学習につきましては、多くが大学での授業や、先生方のご指導によるものが多く、日頃より熱心なご指導をされていることが伺われます。

また、最近の傾向として、インターネットによる情報収集が盛んであり、その意味では、独学によっても多くの情報を得ることができると思われれます。

質問6についてですが、

今回出場した学生の多くは、次回も出場する意志を表明しており、②の今回は出場したくない、という学生の場合も4年生で卒業・就職によって次回出場が叶わないものであり、このコンテスト出場に大変刺激を受け、就職後の更なる勉学の決意を述べています。

今回の通訳コンテストの出場経験を今後ご自身の中でどのように生かそうとお考えですか？という質問7についてですが、(資料3参照)

今回の通訳コンテストで良い成績を収めた学生も、生憎充分に実力を発揮できなかった学生も、全員が通訳コンテスト出場に向けての勉学が自らの能力の向上に大変プラスになった事を述べるとともに、現在の自分のレベルを知ることによって、今後の更なる能力向上に励むモチベーションアップのきっかけとなったことを述べています。

質問8. の出場学生の通訳コンテストに対する感想ですが、

Ⅱの逐次通訳するスピーカーの区切りについては、ほぼ全員がちょうど良かったと答えています。Ⅰのトピックの内容については、難しかったという感想が非常に多く、Ⅲのスピーカーの話すスピードについてもやや早いを含め、早すぎたという感想が多くありました。

今回、コンテストのトピックの内容については、参加学生、及び観覧者からも難しすぎるというコメントが沢山ありましたが、その中で質問9のトピックの内容について、一人の学生は次のようなコメントを述べています。

「トピックは難しかったが、実際の通訳の現場でもそのように難しいト

ピックが扱われることを考えれば、今回のようなレベルが次回以降のコンテストでも維持された方が実践的になると思うので、通訳者を目指す人にとっては参考になると思う。」

このコメントを読んで、私は大変、意を強くしました。

私としては、この通訳コンテストを開催するにあたり、できるだけ実際の通訳現場に近い体験をさせたいという思いがありました。その中で、優劣をつける事は学生にとって大変過酷な体験になるとは思いますが、出場者のアンケート内容にもありますように、非常に困難な目標に向かって努力したことが、自らの大幅なスキルアップを果たし、それを乗り越えた後では、貴重な体験となったことを実感できると思いますし、その困難な壁を乗り越えたことは、今後とも、その学生にとって大きな自信につながると思います。

また、我が校にてこの通訳コンテストを開催するにあたり、通訳コンテスト出場を目指す学生が大幅なスキルアップをする為には、少数精鋭による通訳訓練を行う場が必要と考えました。まず、通訳研究会を2年前に設立し、昨年からは、ICC (International Communicator's Circle) 通訳サークルを正式に発足させることができました。当初、このサークルは、通訳コンテスト出場学生を特別訓練させる場として考えておりましたが、活動の大半を学生に委ねることによって、学生の自立独立意識を高めると共に、モチベーションが大いに高まり、自発的な通訳訓練に励むようになった事は、私としても予想外でありました。教育における学生のモチベーションアップや、努力する為の動機付けというものは、単に外部（教育者）から与えられるものではなく、また、押しつける物でもありません。学生自らが目覚め、自らが学習する事に興味を抱き、自らを鼓舞することこそが、成長における最大の糧だと思ひ知らされる結果となりました。

通訳とは、単に起点言語から目標言語への忠実な変換を行うというだけでなく、文化的、社会的文脈を判断し、状況に応じた適切な表現をすることで、初めてその職責を全うします。所謂、異文化コミュニケーションとも言えるものであります。

デル・ハイムズはコミュニケーション能力とは、Grammatical competence 文法的能力、Discourse competence 談話能力、Sociolinguistic competence 社会言語能力、Strategic competence 方略的言語能力であると述べています。グローバル化された現代社会では、外国語と出会う機会が多くなり、自ら情報発信を外国語で行う機会も多くなっています。通訳教育には、通訳法だけではなく、青山学院大学の染谷泰正教授が提唱しているように、応用言語学、認知心理学、異文化コミュニケーション等にまたがった教育が必要となってくると考えられます。

今回、通訳コンテストでのアンケートをとり、分析をした結果、通訳を学ぼうとする学生にとって、通訳コンテストが飛躍のスキルアップをさせる機会となり、その為の努力をする大きな動機付けとなった事が証明されました。今後更に、他大学との交流を一層深め、より高いレベルの通訳コンテストにすることを通じて、通訳教育に貢献していく事が必要であると考えます。

参考文献

- ・野島久雄著「人が学ぶということ」北樹出版
- ・稲垣佳世子著「人はいかに学ぶか」中央公論社
- ・速水俊彦著「自己形成の心理」金子書房
- ・染谷泰正「通訳教育方法論コース1」立教大学
- ・ノーム・チョムスキー著「言語と思考」松柏社
- ・Hymes, D. (1972) On communicative Competence. In J.B. Pride and J. Holmes (Eds). Sociolinguistics: Selected Readings. Harmondsworth: Penguin Books.

資料1

第2回通訳コンテスト 来場者アンケート結果

1. ご職業をお教えてください。

①高校生	1名
②大学生（NUFS・他大学）	33名
③大学院生	5名
④教員（高校・大学等）	14名
⑤一般	23名
合計	76名

2. 今回のイベントをどういった手段でお知りになりましたか。

①週刊 ST ニュース	6名
②新聞広告	3名
③駅のポスター	6名
④大学ウェブサイト	9名
⑤友人や知人から	27名
⑥その他	28名

3. 今回、通訳コンテストを観覧したいと思った理由をお知らせください。

①通訳に興味があるから	48名
②将来参加したいと思ったから	6名
③現在、通訳・翻訳関係の仕事に就いているから	9名
④友人に誘われたから	2名
⑤講演等に興味があり聴きたかったから	23名
⑥その他	12名

4. 今回、通訳コンテストを観覧して、どう思われましたか。

①通訳に興味を持って、大変良かった	33名
②通訳の勉強をしたいと思えるほど興味が持てた	15名
③通訳は大変な仕事だと思った	38名
④将来、機会があればこういったコンテストに出場したいと思った	7名
⑤その他	15名

5. このようなコンテストを開催することについてどう思われますか。

①学生が勉強した成果を発表する場になることで、大変意義があると思う	75名
②もっと違うような形で開催するとよいと思う	1名
③その他	2名

6. その他、お気づきの点やご意見、ご感想などございましたら、ご自由にご記入ください。

資料2

第2回通訳コンテスト 出場者アンケート結果

1. 英語を勉強しようと思ったきっかけは何ですか？

2. 今回、通訳コンテストに出場を決意した理由は何ですか？

①将来通訳になるために役立つと思うから	1名
②自分の力を試したかったから	4名
③先生や知人に勧められたから	6名

3. 通訳コンテストに出場しての感想

①自分の能力に自信が持てた。	0名
②自分や他の学生のレベルを知ることができた。	8名
③今後の学習に対するモチベーションが高まった。	8名
④他の大学の学生と交流できて楽しかった。	6名
⑤その他	0名

4. 通訳コンテストに向けて、どんな学習をしましたか？

①トピックについて文献やインターネットなどで知識を得た	10名
②積極的に英語に触れる機会を作った	2名
③先生に指導をしていただいた	9名
④その他	2名

5. 日頃、主に通訳の勉強はどのように行っていますか？

①大学の授業で	8名
②クラブ・サークル活動で	3名
③独学で	4名
④その他	1名

6. このような通訳コンテストについて

①次回も出場したい。	7名
②次回は出場したくない。	1名
③その他・未回答	2名

7. 今回の通訳コンテストの出場経験を、今後ご自身の中でどのように生かそうとお考えですか？

8. 今回の通訳コンテストの感想をお聞かせ下さい。

I. トピックについて

①難しかった	7名
②ちょうど良かった	3名
③易しすぎた	0名

II. 逐次通訳する際のスピーカーの区切りについて

①長すぎた	1名
②ちょうど良かった	9名
③短すぎた	0名

III. スピーカーの話すスピード

①早すぎた	4名
②やや早い	2名
③ちょうど良かった	4名
④遅すぎた	0名

9. トピックの内容について要望があればお聞かせ下さい。

10. 進行形式や会場の設備などに関しまして、何かお気づきの点がございましたらお聞かせください。

資料3 通訳コンテスト 出場者アンケート

質問1 英語を勉強しようと思ったきっかけは何ですか？

回答

- A. 高校留学を機に英語学習に興味を持ったため。
- B. 中学卒業後すぐにオーストラリアに3週間ほど短期留学（学校の生徒3人程度）がきっかけ。
- C. 異文化交流の為や、自国である日本を他の視点で見たかったためです。
- D. 英語が好きで、将来英語を使用する職業に就きたかったからです。
- E. まずは小学校1年生の時にアメリカに住んで必要に駆られて。帰国してかなりのスピードで忘れてしまったのですが。中学の時は、スイスに住んでいたので数学以外で現地の子と互角に戦える？のは英語だったので。高校では帰国子女なのに英語が話せないことにコンプレックスを感じて。大学では、授業でほとんど英語がないので通訳サークルに入ったらとってもおもしろかったから。
- F. 外国人とのコミュニケーションや外国の文化・情報を学ぶために英語の必要性を感じたこと。小学生高学年頃のことです。
- G. 中学の時、新しい言語を学ぶことの面白さを覚え、英語を話すことで世界中の人々と話すことができ、自分の世界観が広がると思ったため。
- H. 幼少時に海外でうまく自分を表現できないという体験をし、日本語以外の言語も学びたいと強く思ったこと。
- I. もっと自分の視野を広げたかったため。世界とつながるツールが欲しかったため。
- J. 海外の文化に興味があったため。

質問7 今回の通訳コンテストの出場経験を、今後ご自身の中でどのように生かそうとお考えですか？

回答

- A. 今回のコンテストで、自分への課題を再確認でき、また、他大学の方々の实力を見ることができましたので、今後の学習にそれを生かしたいと思います。
- B. もっと実践の場を増やしたいと感じました。

- C. 気持のコントロールをするために、準備で自信をつけられるよう事前に勉強することの大切さを実感いたしました。又、言語に敏感になり、社会的に受け入れられやすい用語かどうか、又は、耳で聞いて理解しやすい言葉かどうかなど、聞き手に気配りをする大切さも生かしていきたいです。
- D. 今回出場させて頂いたことで、自分の未熟さを再確認することができましたので、もう一度原点に戻り、まず、英語力の向上、知識の向上に努めたいです。
- E. テーマ、多文化主義が興味深かったので、今までは見過ごしていた新聞記事なども、ふと手に持って読んでみたり、コンテストの準備がきっかけになって「勉強」と思わない形で知識が増えている気がしました。出場してみても一層先生方のコメントが心に残ったのと、改めてこれからも頑張ろう、という気持ちになりました。
- F. 自分自身を客観することが出来た結果、英語そして通訳の力における苦手な部分が明らかになったので、その点を集中して克服していきたいと思う。
- G. やはり通訳をするには、前もって勉強して予備知識をつけることが必要だと思いました。今後、通訳のみにかかわらず、自分が実際の社会で仕事をするにあたって、新しいことを自ら積極的に学び取ろうという姿勢をこのコンテストを通じて持てたと思います。
- H. コンテスト出場に向けての勉強であらたに学んだ単語や考えに関連する事がらを取りこぼさずすることで語彙や知識を深めるきっかけにしたい。
- I. 本番に向けて勉強したことが自分の中で非常に大きなものになっています。これは社会に出ても共通するものではないかと思います。
- J. 今回の経験をふまえて、やはり将来的には通訳になりたいので、長期的なスパンで考えて、知識や語学力をもっとつけたいです。テレビなどを聞きながらも、メモをとり、きれいに通訳できるように練習していこうと考えています。

これとは違いますが、この様なコメントを送ってくれた学生さんもいました。

「この思いはこれからの新たなスタートへの大きな原動力となることを私は確信しています。それまでは、大学生活にどこか満足していた自分がいました。留学をし、英検や TOEIC である程度納得のいく成果を残してきて、よくやっとなら自分で合格点をあげていたのかも知れません。……負けていられないという強い向上心を持つことができました。それも全てコンテストに出場して得た財産であり、また最初から逃げ出すのではなく挑戦することで多くを手にする事ができるのだと実感しました。」